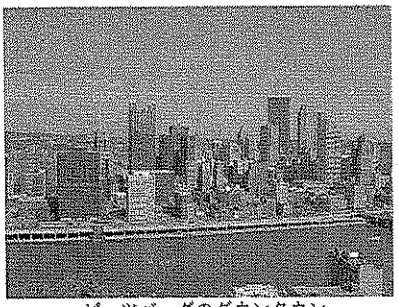
アメリカから日本を見て

ピッツバーグ日本語補習授業校　校長　佐伯佳彦

はじめに

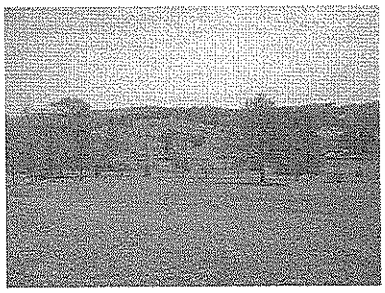

ピッツバーグのダウンタウン

皆さん、こんにちは。私は、アメリカ合衆国ピッツバーグに平成１７年３月より赴任しています佐伯と申します。小中学校課のホームページに国際理解教育（世界の教育と生活）のカテゴリーが誕生したようで、おめでとうございます。

それでは早速、ピッツバーグの紹介をいたします。

ピッツバーグと聞けば、鉄鋼と石炭の街で曇ったイメージを持たれていると思います。しかし、現在では、市内に一歩足を踏み入れた途端、美しい街に変貌しているのに驚かれると思います。また、米国雑誌の選んだ企業500社が本社を置く第３位の都市にもなっています。

小高い丘や豊かな水など美しい自然に囲まれて「アメリカで最も住みやすい町」としてランキングされたこともあり、多くのアメリカ人の憧れの地となっています。美術館、クラシック音楽など芸術性の高さも全米でも屈指です。また、ゴルフ場は全米で最も多く（人口比に対して）、庶民のスポーツとして至る所で楽しむことができます。


ピッツバーグのゴルフ場

メジャーベースボールチーム（ピッツバーグ・パイレーツ）、フットボールチーム（スティーラーズ）、アイスホッケーチーム（ペンギンズ）など、どの球場も大きくてたいへん綺麗です。

２００６年のＭＢＮアメリカンフットボールでは、スティーラーズがワールドチャンピオンになったことは記憶に新しいことだと思います。

ピッツバーグの教育事情

日本と違い、アメリカではstateやschool discrict（鳥取県で例えるならば大山町教育委員会程度の広さ）でカリキュラムが違います。従ってピッツバーグの教育内容、制度は近隣の都市（ニューヨーク等）とは異なっていると思ってもよいのです。

ピッツバーグでは小学校・中学校・高等学校までが義務教育になっています。もちろん授業料を徴収しません。教育地区の税金で学校が運営されているので、税金を多く支払う地区では教育サービスは良くピッツバーグ補習校がある地区では、高校生一人当たり約＄７，０００が年間の教育費として保障されていて、ソフト・ハード面ともたいへん充実しています。

テニスコートから補習校を臨む

大学入学のためには、内申点とＳＡＴ（標準テスト）で複数校受験することができます。ご存知だと思いますが、アメリカの大学は”入口を広く、出口を狭くする”という考えで、学ぶ学生には飛び級制度、奨学金制度、インターンシップが充実し、”入れば天国”と誤解している日本の大学とは随分異なります。また、社会に出てからも大学に再編入できるシステムがあり、転職も日常的です。したがって大学等で新たに資格を取得し、その能力を買ってくれる会社に再就職し、ステータスを上げながら、それぞれの人生を歩んでいくという社会構造になっています。

高校生・大学生は、真面目に勉強しないと進級、卒業は困難です。また、ボランティア

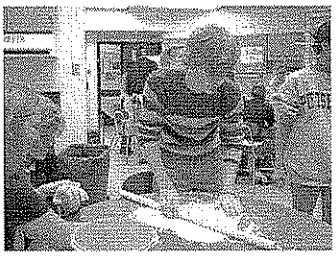
やアルバイトが推奨され、片手には参考書を持ちながらスポーツジムやガソリンスタンドなどでアルバイトに汗を流している光景には驚かされます。

この町には肝臓移植で世界的に有名なピッツバーグ大学とコンピュータサイエンスの最高峰カーネギーメロン（CMU）大学がありますが、日本からの３０才台の留学生も多く、世界の最先端技術を学びます。

グローバルスタンダード（英語能力は常識）

アメリカ合衆国で１年間仕事をしてみて、一番苦労したことはやはり”言葉”です。サバイバル英語は少しできるようになったのですが、速いネイティブスピーカーのヒヤリングや詳細に伝える表現ができず大変困りました。

実は今年、校舎借用継続契約の更新ができないことを突然告げられました。市内の学校の改編に伴い、１００名の生徒を受け入れることになり、現在使っている教室、倉庫、事務室を返却しなければならなくなったのです。


文化交流（うどん打ち）より

早速新校舎探しに明け暮れました。行く先々の学校に対し十分な説明ができず、校長として情けない状況に追い込まれました。運営委員長（三菱電気駐在員）は、英語を流暢に話すことができ、助けて頂きました。企業人としての能力以外にグローバルスタンダードに対応した教育を受けて赴任しています。「英語は世界のどこに行っても通じるので、もう少し勉強しておくべきだった。」と話されていました。

現在、殆どの日系企業が北米に来ていますが、特にトヨタ、ニッサン、ホンダ、ＳＯＮＹ、パナソニックなどはアメリカで大変評価され、多くの駐在員が派遣されています。日本の商品は良質でアメリカ社会にはなくてはならぬ存在となっていますが、その経営者は殆どが米国人であり、会議はすべて英語となっています。

今後、ますます地球のボーダレス化が進むのは確実です。自国だけで仕事ができるような時代は終わり、他国とのコラボレーションが必要な時代になったように感じています。「国際化＝英語」と言ってた時代から、「国際化」の文字は消え、「英語＝常識言語」となっているのです。

次の学習指導要領では、英語を教科にするか否かと議論されているようですが、グローバル社会で生き抜くには英語力はなくてはならぬ能力なのです。ピッツバーグには日本人以外にアジア人（中国人、韓国人、インド人）が１／１０程度在留していますが、彼らは小学校から英語教育を受け、流暢にアメリカ人と話し合うことができます。

全校朝会　音読発表より

また、アメリカの小学校では、母国語以外に第２外国語として、スペイン語、フランス語、ドイツ語などを学び、最近では中国語をカリキュラムに入れている学校も出てきました。

”日本語がしっかりできないのに英語なんて”と論ずる方もいますが、２１世紀を生き抜くためには小学校より「英語」を積極的に導入する必要性を感じました。もちろん、豊かな日本語力や他の国と交流できる力（異文化理解力、柔軟な思考力、環境適応能力等）も必要で、国語や総合的な学習の中で”～ごっこ”のような真似事に終わるのではなく、実際に生きて働くカリキュラムを設定し、指導する必要性を強く感じています。